

良きところ「有島」に暮らして想う

“1922年7月18日狩太村（現在のニセコ町）の農場主有島武郎が弥照神社に小作人を集め無償で農場を解放する「農場解放宣言」を行った。”

この一文の裏に当時どのようなドラマがあったのか。現在の資本主義システムの中に置き換えるならば資本家が利益を放棄して労働者たちが自ら生産したものやその収益を自由に使えることを意味していることに等しい。しかもこの宣言の中にはその労働者の頭数に分割して、という意味ではなく合同してそれら全体を共有し互いに助け合い「相互扶助の精神」を持って将来を導いていってほしいという願いが込められている。

この百年、世界では様々な出来事がありその中で日本は相対的に豊かな国となった。反面、経済的な豊かさや便利さを求めた結果、その代償として多くの大事なものが失われた。急激な経済成長の裏には大量生産、大量輸送、大量消費、大量廃棄など地球資源にとって負の活動があった。それらは環境破壊や気候危機などの原因になっている温室効果ガスを発生させ毎年のように異常気象を引き起こしている。

また経済成長至上主義が生み出した社会の貧困化原因のひとつに、行き過ぎた資本主義システムがあげられる。経済競争が過熱し拝金主義の資本家や経営者がこぞって利潤を追求し、「さあ買え、今買え、もっと買え」とばかりに消費者にさらなる消費を促し続ける。低賃金で労働者を働かせて得た事業収益を搾取し、更なる利益搾取の為の事業に資金をつぎ込む。この社会システムが大きな経済格差を生み出し、富める者と持たざる者との分断を拡大させた。

巨大商圏の都市部に人口が集中し効率化のもとに文化や経済が形成されて地方から人口や富を吸い取る。地方が過疎化し一次・二次産業が弱体化した一方で都市部に流入した人々が成長華やかに見える金融産業や需要変動の激しいサービス業などの虚業に群がり、結果として未来に希望の持てない若者が増え人口減少社会を加速させている。

これが便利・快適・合理性を追求し科学技術的にも飛躍的に進歩した文明国家であるはずの国、世界の先進国、世紀の経済大国、「日本」の偽らざる姿である。

果たしてこれは百年前に描いた未来の豊かさなのか。今となっては取り戻せないものが多くなってしまう。

ただし、と思うことがある。日本の社会構造の矛盾や制度の不備、政治不信や経済成長至上主義の愚などをいくら並べても不毛で虚しい嘆き節である。社会全体がダメだから、指導者やリーダーたちが道を間違えたから迷走する亡国になったと結論付けたところで、はいそうですかと諦めきれない人生ではない。それでも明日はやってくるのである。

もし、自ら考え行動することで人生の道を切り拓くなら持たざる者すべての希望が叶わない

わけではない。人生で重要なのは嘆き節の能書きではなく道を切り拓くための行動である。ではそれを「挑戦できる場所」はどこか。

我が半生を振り返ると激動の世の中を過ごしてきたように思う。学業を修了し社会に出る時には就職氷河期世代と呼ばれ不安定な雇用状況下で辛酸を舐めた。正規雇用という幻想椅子取りゲームを早々にドロップアウトし、夢も希望もないこの国を出て自己実現を果たすべく海を渡り旅に出た――、ところまでは良かった。確かに自分の力で探求して充実した時を過ごし、夢を叶えた気分になっていた。しかしそこで終われないのが人生である。

その後の長い道のりをどこで何をして過ごすのか。世捨て人、社会不適合者としての気持ちと、それでもこころ豊かに充実して生きたい思いを持っていった。そうして海外を放浪した後で幸運にも辿り着いたのがこの小さなまちニセコ町だった。

私がこの町に移り住んだのは2002年、27歳の時である。今でもそうだが刹那的な生き方で、いつもその場しのぎでノープラン。行き当たりばつたりのしくじり人生。滑って転んで落っこちて、最後に包み込んでくれた愛すべきニセコ町である。

思えば移住したところからの人生のビッグイベントの大半が展開された劇場がこの町だった。私にとって挑戦できる場所がこの「ニセコ町」だったのだ。妻とふたり、一人の知り合いもないところから始まり、まさかの連続、出来すぎの人生、支えられた人達の多さに感謝して過ごす日々がこのニセコ町有島にあった。

個人的な世迷言だが、この有島での暮らしは一極集中の続く東京とは同じ国、同じ時代と思えないくらいゆとりがある。もちろんそれは市場的で物質的な豊かさではなくもともと原始的で本質的なものだ。それがこれだ。

「生産の大本となる自然物即ち空気、水、土地の如き類のもの。それらは人間全体で使うべきもので、或いはその使用の結果が人間全体の役に立つように仕向けられなければならないもので、一個人の利益ばかりのために、個人によって私有さるべきものではありません。我々の将来が、協力一致と相互扶助との観念によって導かれ、現在の不備な制度の中にあっても、それに動かされないだけの堅固な基礎を作り、我々の正しい精神と生活が自然に周囲に働いて、周囲の状況をも変化する結果になるようにと祈ります。」

もしこれまで多くの富める者たちと持たざる者たちが互いに助け合い有島武郎の遺訓である「相互扶助の精神」を持って社会を築くことができたらどうなっていたらだろう。今よりは本質的な心の豊かさがもたらされ希望に満ちた社会が実現していたのだろうか。過去と他人を変えられないが、それでも間違いなく言えることはこれからの百年で個々の人間がどんな行動をするかでこの社会の興廢が大きく決まっていくということだ。果たして豊かさとは何か。

終わりに、まちづくり基本条例を掲げている大好きなこのニセコ町で暮らせていることと、住むことが誇りに思えるまちの有島地区で子育てをさせてもらったことに深く感謝したい。いつかこの町で育った子供たちが世界に羽ばたく時が来るかもしれない。その時に会う人たちから出身地を聞かれたなら「北海道」ではなく「ニセコ町です！」と胸を張って答えてほしい。

そんなことを今、私はこの――、



良きところ「有島」に暮らして想うのだ。